

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：33804

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23593345

研究課題名(和文) 妊娠期から継続的に行う父親のための母乳育児支援教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a continuous education program starting from pregnancy for fathers to support breastfeeding

研究代表者

黒野 智子 (KURONO, Tomoko)

聖隷クリストファー大学・看護学部・准教授

研究者番号：10267875

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、父親が母乳育児の支援者となるように教育するプログラムを作成することである。生後4か月の健康相談時に行った第一子を持つ父親への調査では、妊娠中の父親の母乳育児方針が母乳育児率と関連し、母乳育児を行う妻と子からの疎外感を抱く父親もいた。また、具体的な支援法を知っている者も少なかった。そこで、1) 母乳の利点、2) リラックスの必要性、3) 父親の母親へのソーシャルサポート、4) 授乳方法、5) 妊娠中の母乳育児の方針についての妻との話し合い、6) 母乳育児をおこなう妻と子にネガティブな感じを抱くことについて、等からなる父親への支援プログラム案を作成し、修正を図り完成させた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was conducted to develop an education program to encourage fathers to support breastfeeding.

According to a survey to father with the first child (199 respondents) conducted at the 4-month health visit, father's policy about breastfeeding of the pregnancy period was related to breastfeeding rate, and some of fathers had a sense of alienation from their wives and infants, and not many of them knew, in concrete terms, how to support their wives. Therefore, as a breastfeeding support program for fathers, a draft program was drawn up, which included the following issues: 1) The advantages of breast milk; 2) The need of the relaxation; 3) Provision of social support to the wives; 4) Method to breastfeed the baby; 5) Setting aside time to talk to the wife about breastfeeding; 6) Reinforcement of the relationship with the wife, without having negative feelings towards the wife on account of breastfeeding. Based on the opinions, the draft was revised and completed.

研究分野：医歯薬学・看護学・生涯発達看護学

キーワード：母乳育児支援 父親

1. 研究開始当初の背景

母乳育児は、母児の絆の形成を促し、母乳は児にとって最適の栄養であるばかりでなく、母乳育児をすることが母親の健康にとっても良い影響をおよぼすことから、その重要性は世界中で認識されており、生後6か月間は母乳だけで育てることを勧めている (WHO/UNICEF, 1989 ; アメリカ小児科学会, 2005)。

我が国の母乳育児の現状は、平成17年度乳幼児栄養調査 (厚生労働省, 2006) では、10年前に比べると産後1か月で母乳を与える割合は増加しているが、混合栄養の割合が母乳栄養の割合を上回っており、母乳のみを与えている割合は4割にしか過ぎない。また、産後2か月以降からは人工乳のみの割合が上昇しており、産後約4か月では人工乳のみの割合は混合栄養と同じく全体の3割以上を占めている。

母乳育児が上手くいかない要因には、母児異室や定時刻授乳指導、ラッチ・オンの情報の欠如、医学的な理由なしの人工乳などの出産施設や「授乳指導」の問題、乳頭痛・乳腺炎・母乳不足 (感) といった困難があり、家族を含めた周りからのサポートが少なかったということも一因であると言われている (松村ら, 2009 ; 栗野雅代, 2008 ; 中田, 2008)。

母乳育児に対する家族のサポートについては、日本では里帰り分娩や産後の里帰りは70%以上を占め、実家に帰り実母からの手厚い支援を受けることが多く、夫がその期間母乳育児をサポートする機会は少ない (永山, 2000) 。しかし、「授乳や食事について不安な時期」は、第1子では出産後1か月～2か月の時期が出産直後に次いで高い (厚生労働省, 2006) 。子どものいる世帯の75.6%が核家族である (厚生労働省, 平成18年国民生活基礎調査の概況, 2008) ことから、母親が実家から自宅に戻り父親と子どもと3人の生活がはじまる生後1か月過ぎから2か月ごろにかけて、父親による母親へのソーシャルサポートの重要性が増してくると考えられる。しかし、平成18年版「厚生労働白書」によると、6歳未満の児のいる日本の男性の育児時間の平均は48分と他の先進国と比べて最低の水準であり、父親が短時間でも効果的な母親への母乳育児についてソーシャルサポートをおこなうことができるような教育支援プログラムが必要になってくる。

国外での研究では、父親が母乳育児におよぼす影響に関する1976年から1995年間の23文献のレビューからは、母親が母乳育児の選択を決定する時や母乳育児のプロセスの中での重要な決定因子として父親の母乳育児に関する知識や考え、母乳育児で感じる気持ち、およびソーシャルサポートが確認されている (Bar-Yam N.B, Darby L, 1997 ; Pavill, 2003 ; Pisacane, 2005 ; Riordan, 2005 など) 。また、

看護者による妊娠期の父親への母乳育児に関する教育プログラムの効果 (Riordan, 2005 ; Pisacane, 2005) や、母乳育児に関する父親同士の「ピア・ダディープログラム」の効果 (Jewell S., 2004) についても、明らかにされてきている。

他方、日本では、育児不安とサポートに関する研究から、父親は育児支援者としての重要な役割を担っている (唐田, 2008 ; 川井, 1996, 2008) 。しかし、父親の母乳育児支援に焦点をあてた研究は、母乳継続を可能にする要因の1つとして「夫の理解あり」が関連していることを明らかにした研究 (中田, 2008) 、生後4か月健診時の「夫の協力的な態度」は母乳栄養確立に関係が深いこと (猪崎聖子, 1999) などが報告されているが、いずれも母親を対象とした調査であり、父親に対して父親の母乳育児に関する認識や母親に対するソーシャルサポートの具体的な内容や父親のための母乳育児介入プログラムはほとんど見当たらない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、生後4か月の第1子を持つ父親の母乳育児に対する認識および母親へのソーシャルサポートと母乳育児の実態を明らかにし、妊娠期から継続的に行う父親への母乳育児支援プログラムを開発することである。

3. 研究の方法

生後4か月の第1子を持つ父親の母乳育児に対する認識および母親へのソーシャルサポートと母乳育児の実態について

(1) 研究デザイン：記述的研究デザイン

(2) 調査期間：2011年1月10日～10月18日

(3) 対象：母乳を哺乳している生後4か月の第1子の父親、

(4) 調査方法：自記式質問紙による調査。

(5) 調査内容：図1に示す通り、【母乳育児の認識】 妊娠中および生後4か月時点の母乳育児についての方針 母乳育児で育てたい度合いを4段階で回答。母乳育児の知識 『子どもにとっての母乳の意義』、『母乳の分泌促進の方法』、『母乳量確保の評価』に関する計10項目、母乳育児をする妻に対する気持ち 『母乳育児に肯定的』、『授乳に対する関心』、『妻と子からの疎外感』に関する計8項目。【母親へのソーシャルサポート】 『情緒的サポート』、『道具的サポート』、『情動的サポート』、『評価的サポート』に関する計21項目。【母乳育児】 母乳栄養、人工乳使用栄養。【属性】 父母親の年齢、職業、家族形態、児の出生体重。

(6) 分析方法：質問項目を構成概念妥当性の検証のため因子分析し、内的整合性を検討のためにクロンバック係数を算出。現在の栄養方法を母乳栄養と人工乳使用栄養の2群にわけ、【母乳育児の認識】、【母親へのソ-

シャルサポート】について Mann-Whitney の U 検定および ² 検定をおこない関係性を分析 (有意水準は 5%未満)。

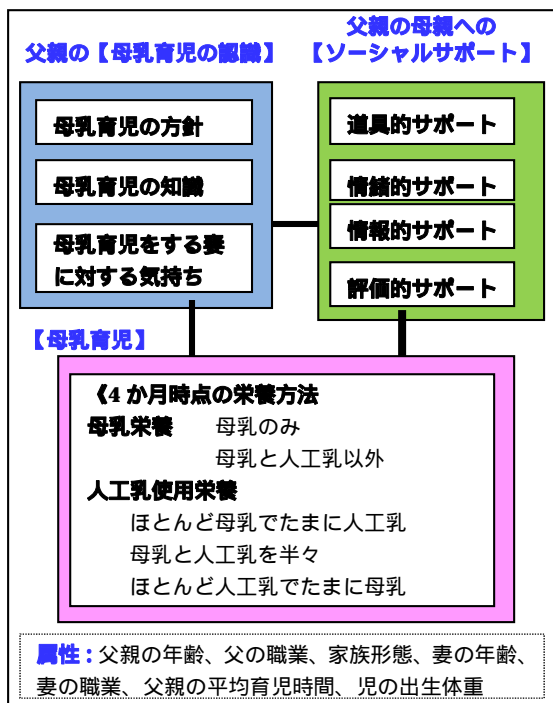


図 1 調査票の内容

(5).倫理上の配慮：研究参加への自由意志の保証、対象者の匿名性の保証、途中辞退の権利の保証、得られたデータの取り扱いについて研究協力依頼文に明記 国際医療福祉大学倫理委員会承認番号 10-5

4. 研究成果

- (1) 回収率：神奈川県 A 市の生後 4 か月児集団健康診査、B 市の 4 か月児育児相談で 313 部質問紙を配布し、返答が得られた 199 名 (回収率 63.6%) のうち、有効回答の得られた 196 名を分析対象とした (有効回答率 62.6%)。
- (2) 質問肢の構成概念妥当性および内的整合性：母乳育児の知識、【母親へのソーシャルサポート】では確認された。
- (3) 生後 4 か月時点での母乳育児の状況：母乳栄養 50.5%、人工乳使用栄養は 49.5%であった。
- (4) 【母乳育児の認識】と【母親へのソーシャルサポート】現状：母乳育児の知識では、『子どもにとっての母乳の意義』、『母乳分泌促進の方法』では 7 割以上の父親が知っているという回答していたが、『母乳量確保の評価』についての知識を知っていた父親は 2~3 割と乏しかった。母乳育児をする妻に対する気持ちは、『母乳育児に肯定的』の因子の中で「母乳育児をしているのでできるだけ妻の手助けがしたいと思う」で、186 名 (94.9%) が思うと回答していたが、「母乳育児は妻との性的な関係を妨げると思う」21.9%、「自分は無用になったような疎外された感じがする」では 13.3%、「妻が母乳育児をしていると子どもに妻を取られたような気になる」で

は 7.1%の父親が、思うと回答し、『妻と子どもからの疎外感』を感じていた。【母親へのソーシャルサポート】の現状は、構成因子である『道具的サポート』、『情緒的サポート』、『情動的サポート』では、7~9 割の父親が実施していると回答していた。

(5) 【母乳育児の認識】および【母親へのソーシャルサポート】が【母乳育児】に及ぼす影響：図 2 に示す通り、母乳育児の方針と母乳育児との関連を見ると、妊娠中に「ぜひ母乳で育てたい」という方針を持つ父親に現在の栄養方法が母乳栄養である割合が有意に高かった ($P < 0.005$)。父親の母乳育児の知識と母乳育児との関連は、「子どもの感染症や病気にかかる率を減らす」ことを知っているという回答した父親に現在の栄養方法が母乳栄養である割合が有意に高かった ($P < 0.01$)。

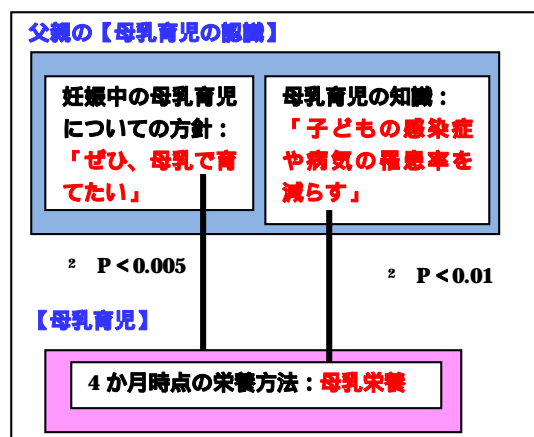


図 2 母乳育児の認識が母乳栄養に及ぼす影響

【母親へのソーシャルサポート】が【母乳育児】におよぼす影響は、父親の【母親へのソーシャルサポート】と生後 4 か月時点での栄養方法が母乳栄養であることの間に関連は認められなかった。【母乳育児に対する認識】と【母親へのソーシャルサポート】との関連は、妊娠中に「ぜひ母乳で育てたい」という方針を持つ父親は、【母親に対するソーシャルサポート】全体の得点が高いという

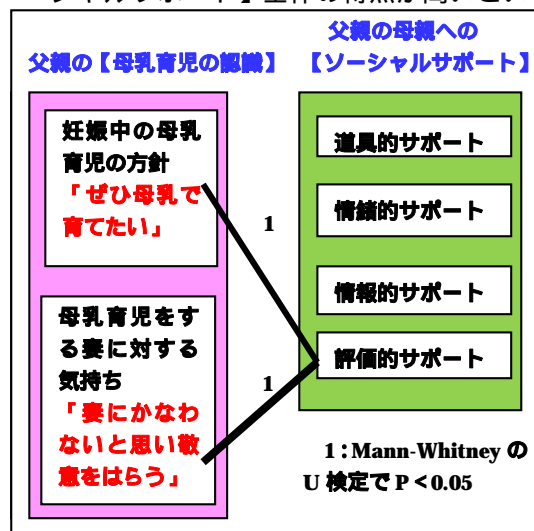


図 3 母乳育児の認識とサポートとの関連

関連は認められなかったものの、図3に示す通り『評価的サポート』を実施している割合が有意に高かった ($P < 0.05$)。
(6) 妊娠期から継続的に行う父親のための母乳育児支援教育プログラムの開発

表1 父親のための母乳育児支援プログラム

時期	内容
第1回目：両親学級後妊娠30週～36週	<p>知識： 1. 母乳の利点（新生児、母親） 2. 母乳分泌のメカニズム リラックスの必要性 3. 父親の母親へのソーシャルサポートについて 情動的サポート：母親の話を傾聴する、関心を示す、共感する、相談に応じる、労わる言動 評価的サポート：父親が母親の母乳育児についての取り組みを肯定的に認める 4. 授乳方法：ラッチ・オンと頻回授乳、児のサイン</p> <p>方針： 母乳育児の方針を妻と話し合う時間を設定、母親と父親が母乳育児の方針やソーシャルサポートについての役割期待と役割遂行に関する考えを述べ合い、パスプラン（育児プラン）の作成</p> <p>情緒：父親が母乳育児をしている妻に対して感じる気持ち 父親同士のグループワーク。ネガティブな気持ち（性的関係を妨げると感じることや妻と子どもからの疎外感を感じることに）について先輩の父親の例を提示し、参加している父親同士のディスカッションをおこなう。グループディスカッションでは、守られた環境になるように、ルールを説明。</p>
第2回：メール配信、産後3～5日	<p>知識： 母乳不足感と母乳不足の情報 児の排泄回数、授乳時間、授乳回数など</p> <p>父親のソーシャルサポート： 情動的サポート 情動的サポート：母乳外来（病院、助産院）の受診の勧めなど 評価的サポート</p> <p>情緒：父親が母乳育児をしている妻に対して感じる気持ち 退院後の父親の戸惑いなどについて、先輩の父親の事例提供</p>
第3回：メール配信、生後2か月	<p>情緒：父親が母乳育児をしている妻に対して感じる気持ち 生後2～3か月ごろの父親の先輩の父親の事例提供</p>

母性看護の専門家4名で、調査結果および先行研究よりプログラム案を作成、第一子を持つ父親および母親のインタビューを参考にプログラム案を修正、完成させた。

参考) 情緒：父親が母乳育児をしている妻に対して感じる気持ちについての事例（父親の体験）の一部を下記に示す。

<第1回目> グループワーク時に提示

・母乳育児をしている妻を見て『母親なんだなあ』と思う。しかし、男性から見て女性の乳房は単純に考えればセックスシンボル。それが子どもができる事によって母親になっていく、自分のものじゃなくなっていく感じがする」など。

<第2回目>

・「授乳しているのを見て、自分は何もできない。でも、この子の為に自分は何ができるのか考えた。母親の手伝いを間接的にやるのが一番いいのかなあと思いましたよね。」

・「子どもが泣いても理由がわからない、ずっと泣かれると自分も精神的にイライラしたり辛くなったりするので、それがすごい辛かった。周りも聞くと、イライラして、夫婦で揉めてって話を聞くんで、どこも一緒に一度は通る道なんだなとは思う」

・「2か月すぎると、大体お腹がすいてるとか、オムツとか、少しわかってきたので、余裕ができてきた感じ。また、子どもも顔を見て笑ってくれるじゃないですか。それが何よりのご褒美になる。」など。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕(計 1件)

黒野智子、生後4か月の第1子を持つ父親の母乳育児の認識及び母親へのソーシャルサポートの実態と母乳育児との関連、第53回母性衛生学会学術集会、2012年11月17日、アークス福岡（福岡県、福岡市）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

黒野 智子 (KURONO, Tomoko)

聖隷クリストファー大学・看護学部・准教授

研究者番号：10267875

(2) 研究分担者

神崎 江利子 (KANZAKI, Eriko)

聖隷クリストファー大学・看護学部・講師
研究者番号：10269631

村松 美恵 (MURAMATSU, Mie)

聖隷クリストファー大学・看護学部・助教
研究者番号：80387505

室加 千佳 (MUROKA, Chika)

聖隷クリストファー大学・看護学部・助教
研究者番号：40616918

藤本 栄子 (FUJIMOTO , Eiko)
聖隷クリストファー大学・看護学部・教授
研究者番号：80199364